



(昭和36年生)

還暦を迎える年頭に想うこと

東区・荒田支部
(鹿児島厚生連病院) 野元 吉二

最近、立て続けにCDを買った。荒井由実「十四番目の月」、今田 勝「アンダルシアの風」、山下達郎「オーパス オールタイムベスト」である。1975年から1985年頃のアルバムである。生来、放浪癖のある自分はこのコロナ禍の中でも月一のペースで車で遠出をしているのだが、車中で聴く曲に学生時代に「よく聴いた、欲しかった」アルバムを無性に欲しくなり買った。特に選ぶ動機はなかったが頭に浮かんだままで購入した。mp3は便利だが実体のない感じがして「どうかするとデータを失うかもしれない」という恐怖があり「実体のある」CDを選んだ。平成生まれの人からは「懐メロ」と呼ばれてしまいそうなものだが、久々聴いてみるとなかなか良い。実際運転中に聴くと元気が出て楽しくなる。何度も聴くが飽きない。20歳前後5年からせいぜい10年間の曲である。「何故だろう？」とふと思った。

「懐メロ」といえば自分の両親の事を思い出す。父親は無類の宴会好きで酔うといつもドーナツ盤の沖縄民謡レコードをかけ、最後はカチャーシーを踊っていた。母親は一人酒しながらテレビで美空ひばりなどの戦後歌謡曲を涙して一緒に歌っていた。丁度今の自分

と同じ年齢の頃のことだった。かかっているのは知らない曲・古臭い曲ばかりで、そのうえ酔っぱらって説教をするのだから子供心には「懐メロ」の類のものは嫌なものの上ない存在だった。父親は鹿児島生まれだが10代途中まで沖縄で過ごした。本当の話か不明だが祖父が株や博打で借金を背負い逃げて沖縄の田舎・山原(やんばる)に移り住んだとのこと。母親は奄美大島生まれで戦前、10代で鹿児島に移ってからとても苦労した様子だった。自分の記憶にある二人が聴いていた曲は10代後半から20代前半の頃の曲ばかりだった様な気がする。丁度、自分が買ったものも同じ年頃に聴いたものだった。買ったCDを聴くとその頃の記憶が蘇り、甘酸っぱい気持ちや懐かしい気持ちで胸一杯となり気分が高揚する。「なんだ親と一緒にじゃないか!」、「年をとるとというのはこんな事なのか」と考えてしまう。10代後半から20代前半の多感な時期の鮮烈な記憶が永く残っており、曲をきっかけにして蘇る様になる。「昔は・・・」と言うのは老いた証拠なのかもしれない、おそらく誰しも同じ途を行くのだらうと考える。体力や飲酒量は数値で分かるが精神的な老いはこんな些細な事に感じるようである。

「昔の曲が無性に聴きたくなる」

還暦を迎えるにあたり、まず思ったこと。

「上手に思い出すこと」

次に思い浮かんだ事である。評論家・作家・古美術鑑定家である小林秀雄が作品の「無常ということ」に書いてある内容で、お気に入りなのか本人の信条か、その後もいろいろな

場所で話している内容である。その中に書かれていた一文を思い出した。「比叡山をぼんやり歩いている時に突然、昔読んだ古典の文章が思い出され景色と混然となり、過去の本当にあったかどうかとも怪しい事が現実に行っているかの様な錯覚 - 自分が生きている証拠だけが充満し、その1つ1つがはっきりとわかっているような時間を巧みに思い出した気がする。」と言う内容である。「思い出は美しい」とよく言われるが、彼は「(自分が) 過去を飾ることで美しく感じるのではなく、過去の方で自分に余計な思いをさせない。(過去は) 不変であるから美しい」、「歴史は動かしがたいもので不変であるから美しく感じられる。動じない美しさがある。」と言っている。

それと似たような経験をしたことがある。私は中学入学直後から考古学にはまり社会科の先生の口利きでよく発掘作業に参加させてもらっていた。話は逸れるが他の勉強はせずにサッカーと考古学ばかりしていたため、いきなり成績はどん底状態だった。それでも何とか高校には進学できたのは幸いだった。中学2年の春に自分の母校、大龍小学校のプール建設時の発掘作業に参加した。大龍小学校は島津15代当主貴久が1550年に内城をそこに建て18代家久が鶴丸城に移すまで50年間島津氏の居城となった場所で、その後大龍寺を経て明治になり小学校となった。ここは縄文時代後期から弥生・古墳時代を経て現在までずっと人々が生活していた場所で、様々な時代の「遺物」が出てくる。指宿式土器や市来式土器、おそらく浮きに使ったのであろう軽石性の石錘など南九州特有の物が出ていた。何か宝探しをしている気分で楽しく作業をしていた。そこで縄文時代の竪穴式住居跡を発掘している時に、住居の傍らに直径20cm、高さ15cm程の黒っぽい壺が埋まっているのが発見された。一緒に発掘していた社会科の先生

に尋ねたところ『子供の骨を入れて埋めたもの』とのことであった。埋甕(まいよう)というが、文献では出産時に出る胎盤(胞衣)を入れて住居内や集落中に埋めたとされ、江戸時代の胞衣納めと同種のものと考えられている。その話を聞いた時『縄文人は情愛が強かった』などとは思わず、『自分の子どもの遺骸を家の傍らに埋めるなんて!』と思った。同時に突然、縄文人の生々しい息づかいの様なものを身近に感じて自分が縄文時代のその頃にいるような錯覚を感じ、妙な気持ちになったことを今でもはっきり覚えている。これも自分の経験や思い出ではないが、過去の歴史が自分に「上手に思い出す」ことをさせた様に思っている。何を言いたいかというと「懐メロ」を聴いて心が揺さぶられるのは自分の動かしがたい歴史が確かにあり、それが鮮やかに生々しく蘇ってくるからだと考えていること。小林英雄は『過去から未来へ続く時間にのみ込まれ何となく流されていた自分が、「上手に思い出すこと」でその面白みのない流れから救われる。』といている。そう言えばカラオケを歌っているジジ・ババ(失礼)を見ると、無表情だった顔が突然何かから解放され、生き生きと見えるのは自分だけだろうか。

「医者賞味期限」

私事で恐縮だが自分は昨年、現在の職場に58歳で転職した。以前、60歳で大学を退職して開業した先生の話聞いたときに「今頃?」と思ったことがあったが、その「今頃?」の転職であった。前の職場には何の不満もなくむしろ慣れすぎた感があったが、開業している兄の「開業医の賞味期限」の話聞いてから自分の胸が急にザワザワし始めたのがことの始まりだった。「開業医の賞味期限」は30年だそうだ。30年もすると子育ては終わり借金

も返してしまうことで言い方は悪いが「脂ぎった気力」が萎えてくるとのこと。勤務医の賞味期限も似たようなものかもしれないと感じた自分は、「何かしないといけない」と言う気持ちに駆られて転職を選んだ。転職をしたら何かが変わるかもしれない、60歳になると自分も動けなくなるし、受け入れる側も難しくなるだろうから「今しかない」と考えたからだ。一人診療科の病院では今と変わらない、同じ診療科医が複数いる場所なら「変わるかもしれない」と考えた。何となくそのまま流され年を経ていく自分の姿が感じられ、「流れを断ち切りたい」と感じたのか放浪癖体質が影響したのかもしれない。当然、妻からは猛反対されたが押し切って転職したら愛想をつかされた。幸い今の病院に雇ってもらえた。「何か変わりたい」と思って転職したのだが今年、自分の想像していない方で本当に変わってしまった。- 腎臓を患ってしまった - のである。これまで患者さんを診る立場が診てもらふ立場にもなった。いろいろやりたいこともあったが一遍に吹き飛んでしまった。日常業務をこなすことが精一杯で、新しい何かをする気力が湧かなくなった。コロナにも一層の注意が必要になった。病気のせいだけではなくだろうがそう思いたくなる。元気な頃は健康については多少意識していたが「自分が悪くなるはずがない」と気にしないようにしていたが甘かった。散々な一年だったが病気をして良かったこともある。本当に健康に気を遣うようになった。暴飲暴食をしなくなった。患者さんに対してのシンパシーを実感として感じられるようになったり、世話になった人への感謝を素直に口に出せるようになった。錯覚だろうが病気をしたことで少しはいい医者になったような気がする。そしてひよっとしたら病気したことで（健康に気を遣うようになり）「病気がなかった場合

より長生きするかもしれない」と思ったりしている。

「還暦について思うこと」

いざ還暦について考えるとやはり「年寄りくさい」ことばかりで嫌になるが、実際は日頃の仕事に忙殺され年齢の事を考える暇がない状態である。特に自分の専門科の肺がんに於ける分子生物学分野の進歩は凄まじく、2-3カ月すると治療が変わってしまう過渡期で、しょっちゅう「パラダイムシフト」なる言葉が出てくる。「スキルの向上」なんて言葉は段々遠いものとなりつつあり、現行治療方針に対応するのが精一杯でとても「思い出す」余裕がない状態である。忙しく暇のない状態は動的で時間に流される「無常」の状態 - 現実には正にその通りの状況である。小林秀雄的には「生きている人間」は「無常」で「しかたのない代物」であり「時間という思想」にのみこまれている。それから逃れるのに有効なのが「上手に思い出すこと」だが暇がないとそれは無理なようで、この分では仕事をする限りは不可能なような気がする。還暦を機にその言葉通りに時間の流れから飛び出して新しくなりたいと考えるが、今のところ「上手に思い出す」よりも「上手に忘れる」ことばかりである。